

## スピリット・ポゼッション：宗教学と文化人類学の 視点から

波平，恵美子  
九州芸工大

<https://doi.org/10.15017/2244060>

---

出版情報：九州人類学会報. 17, pp.111-112, 1989-10-23. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：

## 「スピリット・ポゼッション ：宗教学と文化人類学の視点から」

司会者 波 平 恵美子

スピリット・ポゼッションは宗教学と文化人類学双方の領域におけるいくつかの重要な研究テーマに係わる問題であるが、それだけに、研究者によってまた領域によって曖昧な使われ方をしているために、様々な混乱が生じている。今回のシンポジウムでは、宗教学と文化人類学の方法論の違いを明らかにするというよりは、スピリット・ポゼッションに係るシャーマニズム研究、憑霊信仰と一般に呼ばれる研究等に、これまでとは異なる視点からの研究の可能性を求めることを目的としている。

シャーマニズム研究では、ミルチア・エリアーデが示した「脱魂型」と「憑霊型」という分類が一般に受け入れられているが、シャーマンの信仰活動全体を見た時、このような分類がそれほど重要であるとは考えられない。むしろ、より広く「トランス」と呼ばれるシャーマンの状態、シャーマンがクライアントを「トランス」に導くことがシャーマンの行為において極めて重要であることは明らかであるが、それはどのような意味を持つゆえに重要であるのかは解明されていない。一方、「意識の変性状態（ASC）」と精神医学や心理学で呼ばれる状態が、人間の精神、心理の状態や身体状態にどのような影響を与えるのか、逆に、どのような状況がASCをもたらすのかということが重視されている。

一般に「憑霊」というと、神以外の動物霊や鬼や悪魔などが人間の中に入り込み、その霊の意のままに人間を動かす結果、その人の言動が以前と異なることになるという信仰で、憑霊は望ましくない、病的な状態だという前提のもとに研究が行われてきた。一方、シャーマンの「トランス」や「エクスタシー」は神（守護霊）をシャーマンが呼び出し、その力によって自らの霊魂を自在にコントロールして時空を超えて活動させる、その結果将来を予見したり過去のでき事を知ることができ、また病気を治すことができるため望ましい状態であると考えられてきた。ところで、シャーマンが成巫以前に「巫病」と呼ばれる、それぞれの文化によって内容は異なるが、長期にわたる心身の不調を経験することが多く報告されている。その「巫病」の内容は「ぼんやりしている」、「夢見心地である」というように報告される意識の変性状態が含まれている。また、薬物や煙草などを使ってトランスに入るシャーマンは、明らかに意識の変性状態を最初に作り出すことを、それらによって助長している。また、シャーマンはクライアントをトランスに導くことによって治療を行っているといわれるが、病気治療とASCとは、催眠療法も含めて、深く関わっていることは明らかである。

今回のシンポジウムでは、以上のようなことをも含めて、「エクスタシー」、「トランス」、「催眠状態」、「憑霊」、「スピリット・ポゼッション」、「意識の変性状態」という、従来、それぞれの研究領域やテーマにおいて専用に使われた用語を一旦枠から取り出して、そのうえで「霊（人、神、動物、精霊などの区別なく）」が人間に憑くという信仰は、信仰研究ではどのような研究の可能性を開くものであるかの展望をふまえて、それぞれ御自分の領域での御研究の成果を発表して戴くことを目的とした。

例えば、これは司会者のレジュメを拝読したうえでの勝手な推測であるが、浜本氏の研究は、「霊

が憑いた結果、その人の従来の言動とは極めて異なる言動をする」という信仰が、自我の問題、自己存在についての当該文化の人々の認識を分析するための糸口になるという、従来の憑霊信仰とはまったく異なる研究視野が開かれていくのではないかと考える。

従って、シンポジウムのタイトルである「スピリット・ポゼッション」はまったく便宜上付けられた仮りの題であるとお考え戴いてよろしい。そして、各御発表に対して出席の方々からの刺激的なコメントが、予め指定されているコメンテーター以外の方々から出されることを司会者として期待する。